

4 世界に羽ばたくスポーツ雪合戦

～小さな町が作り上げた世界のスポーツ～



阿野 裕司
ANO Yuji

昭和新山国際雪合戦実行委員会 / 委員長

冬期の地域活性化を目指す北海道の小さな町が、雪の楽しさを見直すことで誕生したスポーツ雪合戦。さまざまな人の協力の中で新しいスポーツ“Yukigassen”として世界中に広がっている。「雪合戦では世界の中心である」を合言葉に未来の夢に向けた壮瞥町民たちの交流と奮闘ぶりを紹介する。

スポーツ雪合戦とは

雪合戦。それは古来、雪国の子どもたちの遊び。その雪合戦が北の大地で冬のニュースポーツとなった。毎年2月、全国の地区予選を勝ち抜いた精鋭約140チームが「スポーツ雪合戦」発祥の地、大地の息吹のような噴煙たなびく壮瞥町昭和新山のふもとに集い、白銀の世界で熱き闘いを繰り広げる。

スポーツ雪合戦とは1チーム7名（他に監督と補欠選手2名）で、36×10mのコートに2チームが対峙する。ノーバウンドの雪球に当たった選手は「アウト」。試合は3分3セットマッチで、時間内に敵陣内のフラッグを抜くか、雪球を相手チーム全員に当たった時点で勝ち。時間切れの場合は終了時に残っている選手が多い方が勝ちとなる。

1セットに使える雪球は90個に限定され、敵の雪球から身を守る「シェルター」に身を潜めながらの攻防は、体力・知力・チームの総合力が勝敗のカギとなる。奇襲

攻撃で敵陣のフラッグを奪うもよし、雪球で敵を倒し判定に持ち込むのもよし。強い精神力と瞬時の状況判断力、そして巧みな戦術が求められるスポーツ雪合戦、筋書きのない戦いに会場は大いに盛り上がる。

スポーツ雪合戦の誕生

壮瞥町は北海道の南西部にある人口2,600人あまりの小さな町で、昭和新山、洞爺湖、有珠山を抱える北海道内屈指の観光地である。雪合戦が始まる前は、観光客の多くが春から秋に集中していたため、冬は人影もまばらで、特に厳冬期の観光客は皆無に等しい状況であった。このことが地域経済を停滞化させ、安定した雇用の確保を難しくしていた。「何とか冬も観光客に来てもらい、地域経済を活性化させることによって通年雇用を確保できないか」ということが壮瞥町の悲願であり、大きな課題であった。



写真1 迫力のあるセンターシェルターの攻防



写真2 有珠山から洞爺湖、羊蹄山を望む



写真3 試合開始前の円陣



写真4 シェルターに身を隠しつつ敵を狙う

そこで、冬期の地域活性化の手法として、まず中核となるイベントを創ることとした。1987年8月、町内若者グループ（商業・観光・農業・公務員）によるアイデア検討会が結成され、スキーマラソン、仮装ソリ大会、大雪像づくり、犬づり大会など数々の案が出されたが、どれも二番煎じで決定打には至らなかった。

議論の空転が続いたある日、意外にもそのアイデアをくれたのは、東南アジアから来た観光客であった。観光客たちは千歳空港に到着するとただちに観光バスに乗り、最初の訪問地である昭和新山に来る。そこで生まれて初めて見る雪に感激し、その感触を確かめる。その次にする行動は雪をかけあい、雪をまとめて投げることである。その様子は喜々としていて、とても楽しそうであった。雪に対する先入観のない人々がする雪投げの行動は、誰に指示されたわけでもなく自然な振舞いである。雪をまとめて投げることは人間の本能なのかもしれない。「雪国に住む者は、日常的に雪を見ているため、雪の神秘さ、雪遊びの楽しさを忘れてしまっていたのだ」と気づいた。普段は厄介者でしかない雪も、180度発想を転換すれば地域固有の資源となる。「親雪」「利雪」を合言葉に、1987年12月、昔遊んだ雪合戦の楽しさを現代風に再生させ、雪合戦をスポーツイベントとして開発することを決定した。

スポーツを核としたまちづくりを推進している自治体は、全国的にみても少なくない。しかし、その多くは既存のスポーツを取り入れる事例がほとんどであり、ゼロから新たなスポーツを創り出すケースは極めて稀である。それがこの実行委員会の活動の最大の特徴である。

スポーツ雪合戦の開発

雪合戦を現代風にどのようにアレンジするのか。その

方向は遊びの要素を残しつつ、スポーツとして育てようということになった。しかし、スポーツとするためには勝敗の決定方法から始まり、コート広さ、プレイヤーの数、使用する雪球の個数、試合時間、審判のジャッジ方法など、決めなければならないことが山積していた。そこで、様々な既存スポーツを研究し、それぞれの要素を取り入れ、競技内容を固めていった。その後、町内外のスポーツ関係者によるルール制定委員会が結成され、ルール原案、解説図の作成、ルールブックの編集などを行い、1988年12月、世界初のスポーツ雪合戦のルールが完成した。

固い雪球から頭や顔を防護するためのヘルメットはスポーツ店兼靴屋の技術を生かし、綱引きのヘルメットにオートバイのシールドをつけて手作りのオリジナル用具をつくりあげた。一試合に540個使用する雪球を一度に大量に効率よく作製するための雪球製造器は、町内農家の人脈により近隣の町の農機具メーカーが開発製作した。コート内に配置するシェルターのつくり方は町内の大工さんから伝授された。自分たちにはない技術や知恵は

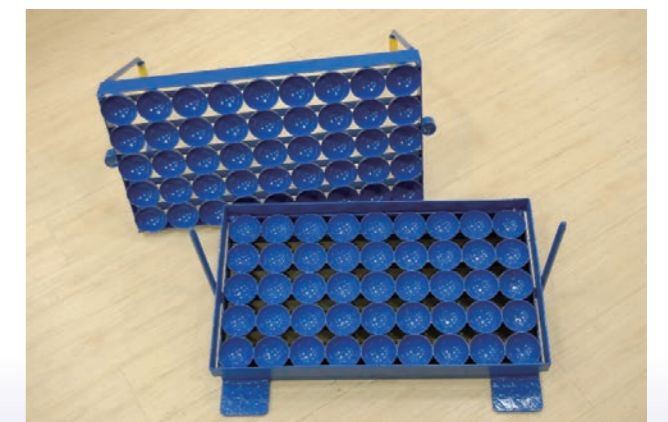


写真5 雪球製造機（一度に45個の雪球を作る）



写真6 国際雪合戦連合発足式



写真7 海外で最も伝統のあるフィンランドチーム



写真8 近年実力をつけてきたカナダチーム



写真9 今回初出場の中国チーム

あらゆる人脈を駆使し、多くの失敗を乗り越え、世界中を探してもどこにもないスポーツ雪合戦用具を開発していった。その後、ヘルメットは国内外への普及に伴う用具の量産に対応し、強度と安全性を高めるための専門的研究や実験のため、大手スポーツメーカーの協力を得てスポーツ用具として商品化した。雪球製造器も軽量化、機能性のアップを図っている。

そして、この競技の最大の課題は安全性の追求であった。雪球を相手プレイヤーに当てる競技特性のため雪の性質を充分熟知していなくてはならず、安全性の確保には、雪球が固くなりすぎないようにする工夫が求められていた。寒風にさらされ、氷となった雪球は、まさに「凶器」である。

そこで、北海道大学低温科学研究所の協力を得て研究を進めた。現地調査では、雪球製作後はすぐ気密性の高い器にいれ外気に触れさせないことなどのアドバイスを受けた。また国立札幌病院に雪合戦顧問ドクターを委嘱し、ケガの状況を分析し医師の立場から今後の用具開発への意見をもらった。これらのアドバイスを取り入れ、現在はビニールハウス内に雪を入れ、ジェットヒーターで雪を温めてから雪球を作る製法や、雪球を入れるケースを製作し、競技開始までの間、雪球が外気に触れないようにすることで雪球の凍結を防止するなどして、大会を運営している。

世界に広がる雪合戦

1989年の第1回大会には町民の予想をはるかにこえた100チーム以上の申し込みがあり、そこから選ばれた70チームが参加した。以降、申し込みは年々増加し、1994年からは大会出場チームを絞るため、予選会を導入した。また、全国各地で雪合戦大会が開催されるよう

になり、北海道内各地はもとより南は大分県まで、町民スタッフが講師として派遣され、現在道内外の24カ所で地区予選が開催されている。

海外普及の第一歩はフィンランドであった。壮瞥町では1993年からフィンランドの北部、北極圏内にあるケミヤルヴィ市と友好都市提携を結んでいた。交流事業の一環として、1995年海外で初めてとなる雪合戦大会を開催した。本町からはルールや大会運営の伝授を含め、少ない予算ながら5名のスタッフを派遣し、無事に開催することができた。

その後も町民スタッフを派遣しながら普及拡大に挑み、1997年からノルウェー、2006年からロシア、2007年からオーストラリア、2008年からオランダ、2009年からスウェーデン、2011年からカナダとアメリカ、2012年からベルギーと世界各地で大会が開催されるようになった。そしてこれからも各国が互いに理解し合い、力を合わせて雪合戦の友好の輪を世界へ広げていくため、雪合戦の国際的な普及組織を設立することとなり、2013年2月22日、海外各国の雪合戦連盟の役員を迎え、正式に国際雪合戦連合が発足した。2016年には中国が正式加盟し、日本を含め12カ国が加盟するまでに至った。世界各地で共通のルールと用具による大会が開催され、海外の大会においても柔道のように“Yukigassen”という名称をつけるよう義務づけ、日本発祥であることの意味を貫いている。

このように海外でも普及が進んだ理由の一つは、雪合戦が道具を用いずに雪玉を投げて相手におつけるという単純さ、かつ人間の本能に近い競技であることである。初めて参加する人でも難しいことは考えずに「投げて、おつける」という単純な動作の繰り返しで、当たればうれしいが、当てられればくやしい。体の奥から熱く燃

え上がるものを感じる。それが雪合戦の魅力である。

また、メディアの発達も大きく貢献してくれた。近年はユーチューブの動画で見て関心を寄せ、海外からの問い合わせも増えてきた。

雪合戦の未来

創成期から現在に至るまで、一貫してこの大会を支えてきたのは多くの町民ボランティアであることを忘れてはならない。人口2,600人のうち約400人が何らかの形で雪合戦に関わっている。若いスタッフは、会場を設営し、開会式を演出し、審判員も務める奮闘振りである。お年寄りも昭和新山は寒いので会場には行けないけれど、会場で販売する雪合戦鍋の野菜切りはできると公民館の調理室で働いている。一線を退いた重鎮たちも大会本部で来賓の接待役を務める。普段はあまり交流する機会が少ない町内各地区・異業種・異世代の町民が雪合戦の協同作業を通じて交流を深めている。

企画・運営は全町的、かつ職種や世代の枠を越えて組織された実行委員会が中心となり、大会開催時だけでなく年間を通じた普及活動が続いている。本業が忙しい中でも、夜討ち朝駆けで各地の大会へ、指導や支援に走った。人前で話すことが苦手な人も先生になり、時には外国人を前に講習を行った。壮瞥町のスポーツを核とした地域づくり、しかも、既成のスポーツではなく、自らが産みの苦しみを、育てることの苦勞を噛みしめながら積み上げてきた実績は、確実に町民の誇りと自信になっている。



写真10 ジュニア交流戦の様子

壮瞥町は辺境の小さな町だが「雪合戦では世界の中心である」を合言葉に、多くの町民が関わり運営、普及を続けている。2018年2月の大会が第30回の節目である。創成期を支えたメンバーの子どもたちが担う時代を迎えている。そして、第28回大会からは「ジュニア交流戦」を開始し、次の世代への普及にも力を入れはじめている。

雪合戦は「壮瞥町」や「昭和新山」の知名度向上、冬期間の経済効果拡大だけでなく、全国や世界の人々と町民の交流を促進させ、地域アイデンティティの向上に大きく貢献している。町民の夢は、平和の祭典・オリンピックの舞台で世界の国々が「友情の雪球」を投げ合うこと。そして、この雪合戦が世界各地で行われるようになって、昭和新山は「雪合戦の聖地」であり、数ある大会の中でも昭和新山国際雪合戦こそが世界最高峰の大会であり続けたいと願う。その日を夢見て、北国の小さな町の大きな挑戦はこれからも続くのである。

<写真提供>
写真1～10 昭和新山国際雪合戦実行委員会